

ニコル アレル 米国出身の元キリスト教徒

5.0

明: 真の宗教の探求は、彼女をイスラームへと きます。

目: [事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: ニコル アレル

📅 4 Nov 2014

集日 15 Feb 2015



私はよく、いかに自分が祝福されているかについて思いを巡らせます。私が今生きている人生は、たった一年前に予期していたような人生とは天地の差があります。たとえば、朝に起床したとき最初に思い浮かぶことや、目指している人生の道、そして特に心と魂です。一年以内に私の人生がこれ程までの をするとは、 にも思いませんでした。それだけではありません。私が今 んでいる道は、以前には存在していると思ってもしなかった道につながっています。旅路の始まりからは、そこから最 的にどこに辿りつくのかは分からないものです。

幼年 代、私は教会に れて行ってもらうことが好きでした。コミュニティの居心地、そして神の崇 は、私の心を魅了していました。私は自分でもそういう思いを 感ずる前から、神のお近付きになることを切望していました。なにか 明のつかない 倒的なものが幼い私の魂をとらえており、私は日曜日の朝に父 を起こしては、教会に れていってく

れるようお いしていた程でした。

あいにく私の家族は平均的な米国人キリスト教徒と同じように、年に2度のカトリックのミサ（クリスマスと 活祭）に出席すれば、自分たちを宗教的と呼ぶことに 足していました。そのため私は「（教会に行くのは）今日じゃなくて、たぶん来 ね」というフレズに れて育ちました。がっかりした私はすねて部屋に じこもり、翌 の日曜日が来るのを待ちわびたものでしたが、同じことが翌 も り返されていました。

成 するに い、私は することのないお いをを止めることを学びました。私は自由 の全てを一人で世界文化や宗教 などの に やしました。自分の宗教であるカトリックの 史について学び始めた私は、教会が教 に する を非 する 向を嫌 するようになりました。私はこう思いました。「これがキリスト教の正しい宗派であるはずなんかない。」

が ちましたが、私はまだ心に くような宗教を つけていませんでした。私は多分、幼少のときに教会で感じたものと同じような感 を求めていたのかもしれないし、それが ナイ ブな 望であることも知っていました。宗教からの 外感、その宗教の主 と矛盾を知ることによって起きることです。

私はどんなに努力しても、三位一体 がじっくり来ませんでした。私は理解の不可能な概念を、どのように信じれば良いのかが分かりませんでした。またキリスト教においては理性が受け入れられず、教 に疑 を呈すことは信仰心の弱さのしるしであると なされることに怒りを感じていました。そうなのであれば、神が人 に理性を与えたのはどのような理由からになるのでしょうか？

やがて私はすべてをあきらめ、自分が真理に到 することはないのだろうと思うようになりました。私は、神はいるものの、人 が神の性 を知る はなく、神に に会うまでは、人 が真の宗教を知ることもないのだろうと断念してしました。

私につい最近、なにか 明のつかないことが起き、真理の探求を再 する になるまでは、そうした考え方を い 持っていました。私がその になったのは、まるで声のようなものが こえるようになったからですが、それは一般的な感 でいう声ではありませんでした

。それはあたかも、いかにかき消そうと みても常につきまとう、しつこいせがみのよ
うなものでした。

私は当然のようにバイブルを 入し、どこかのペ ジに真理が されているのではないかと
思いました。ひよっとすれば、以前それを み ぎっていたのかもしれないと思ったので
す。 にそれが、一番真理に近かったのです。

バイブルを んでいる最中は、当 の世界情 のことばかりを にかけていました。私は空き
の全てをパレスチナ人とス ダン人のための 利の と、世界のあちこちで起きていた 争に
する反 の意思表示ために政府 に手 を出したり、キリスト教の 宗派について んだりして
いました。

私はもしお金を集めることが出来れば、パレスチナでボランティアをすることも 画し
ました。 地での 争、そして自分自身の旅行 画から、当然のことながらイスラ ムについ
て み、その信仰について理解することは、彼らを助ける上で必要であると感じました
。

私はムスリムの信仰について んだこと、つまり三位一体ではなく唯一神の概念、バイ
ブルには欠けていたすべての 言者たちへの敬意の念、クルア ンにおける科学的事 、イ
スラ ムの普遍性、母 の尊重、家族の尊 などに、心を われてしまいました。それは私が
それまで出会った中で、理にかなっていながらも、神の神秘性にも ち溢れた唯一の宗
教だったのです。

でもイスラ ムは、アラブ人のための宗教なのでしょう？

若いアメリカ人女性が わりを持つべき信仰ではないはずです。そう思い んでいた私は
、やがてイスラ ムは世界で最も早く成 している宗教であり、ムスリムの大半はアラブ
人ではなくこと、そして欧米のイスラ ムの成 において最も急速に んでいるのは、 上私
が属している、若い白人女性の であることを知りました。

キリスト教から に背き去るという考えは、たとえキリスト教がいかに の小さなもので
あると思えても、とても恐ろしく混乱させるものでした。私は日曜日に 宗派の教会に

行き、バイブルをより多く読むことにしました。私は自分が求めていたものがつかれることを祈りましたが、それはさらなる混乱をもたらすだけでした。私は依然として三位一体を受け入れることが出来ず、またバイブルにおいてイエスは彼自身が神であるとは一度も主張したりはしなかったことに受けました。

神が地上に降りてきて、私たちの罪のために死んだということを信じなさいと言うことなど出来るでしょうか？

ローマ帝国時代、キリスト教の急激な布教と展開と共に、キリスト教の信条が多神教的要素に包み込まれたという歴史的な事について説明することなど出来るでしょうか？

また放蕩な人生を生きながらも、イエスを信じさえすれば天国に行けるというキリスト教の主張については？

もしイエスが神の化身であると主張されたなら、神に代わられたとイエスが泣き叫んだことは何を意味するのでしょうか？イエスが彼の父に「Comforter

(慰める人)」が遣わされると言及したのは、父についてなののでしょうか？イエスの父に代わると予言された「Spirit of Truth (真理の魂)」とは何のことなのでしょうか？

それらの疑問に押し寄せられそうになった私は、必然的なことを行いました。静かに座りながら、「私が信じるべき宗教をお示してください」と神に祈りました。もし私がムスリムになるべきなのであれば、神は私にそのしるしを示されるでしょうか？

それから、私はハンドバッグをつかみ、静かにへと向かいました。すると静かなことに、私の目の横にムスリム女性が立っており、静かなしるしを探していました。これは、私が祈ったしるしなののでしょうか？

私の静かなしるしは「そんな静かなしるし」と言いましたが、この静かなしるしを逃すまいと、私は彼女に話しかけました。

「すみません、静かなしるしでも良いですか？

あなたはムスリムでしょうか？」彼女は文化や宗教に全く知らない一般人からよく受ける知らない批判を予期し、少し尻みしたように静かになりました。「はい、そうです」と彼女は答えました。私は自分が知っているモスクに彼女が通っているか聞いてみました。私はイス

ラムが、自分にとって理にかなった唯一の宗教であるに思える、と彼女にに言いました。彼女は私が 途マスジドに行くよう しましたが、私はまずクルア ンを みたいと言いました。

を する り道、 がつくとマスジドの前に していました。私は一瞬、これがもう一つのしるしなのではないかと思いましたが、私の は再びその思いを否定しました。私がヒラヒラと れる扉の前まで くと、私の はただちに に り、即刻家に るんだと言っていました。しかし、私の 足は の命令を し、私を前に ませていました。

女性セクションをつけた私は、これまで た中でも最も な に迎えられました。このムスリム女性は、私と同じ年 のアメリカ人改宗者でした。それだけではありません。彼女は私と同じ名前を持ち、自分たちの 去と家族を比べ合った私たちは、その 似性を否定することが出来ませんでした。言うまでもなく、私はその日、その 所でシャハ ダをしました。私の将来の夫となる人物も、その瞬 に同じマスジドにいたということは、その はまだ知る由もありませんでした。アルハムドゥリッラ 。

シャハ ダを行なった2ヵ月 、私は自分の宗教についてある程度の自信と知 が伴ってきたため、最 的に父と 母に改宗について打ち明けることにしました。父は「私は明晰な を持つキリスト教徒として、お前が ちを犯していることは明らかだ」と言いました。私は彼がキリスト教の 践すらしていないこと、そして彼のイスラ ムに する怒りと偏 は痛烈な 当 いであるということにはあえて触れず、神のために を食いしばり 言を我慢しました。

父はそれ以降、私と を取ろうとしませんでしたが、1ヶ月 、 婚した旨をメ ルで知らせると、私が彼にとって死んだも同然であること、そして二度と彼に をしてはならないということを告知してきました。私の 母には今でもメ ルをして家族の近 について を取りますが、私の兄弟、父、そして旧友たちは皆、私との を断 しました。

翌年、私は自分の新しい宗教と共に育ち、どこであっても知 の 得、そして自分に平 と 足心をもたらした宗教の教えを宣ベ えることを心がけています。 在、私はアラビア と

クルアンの朗法を勉強しており、良き妻であろうと努力しています。

今の私の人生は、以前の人生の面影すらありません。私は日、神の法、言者の、そして良きムスリムになるためには何が求められているのかについて学んでいます。たとえばそれらの行いによるが天国ではなかったとしても、私はムスリムとして日の中に素晴らしい平和を出し、神のために捧げる人生を生きることからもたらされる喜びにして感謝の持ちで一杯です。

私は冒で、旅路が最終的にどこに辿りつくかは分からないものであること、そして人生とはにきのではなく、全体としてを超えた化をするものであるということと述べました。に、それらの化はをもたらしますが、それらのを生き延びる者は、にも思わないようなこと以上のものを祝福されるのです。私のケースにおいては、イスラム、そしてより良い人生だけでなく、来世への希望という祝福を受けられました。神こそは最も大なる御方であり、慈悲あまねく御方です。

この事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/1625>

著作権 2006-2015 断を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断を禁じます。